

『鹿百首』 中野康章旧蔵本の翻刻

京極為兼（一二五四—一二三三）が永仁六年（一二九八）に佐渡で詠作した『鹿百首』に、あらたな一本が加わった。標題の中野康章旧蔵本（個人蔵）である。その書誌、およびすでに知られた『鹿百首』六本のうち五伝本との関係を、川崎佐知子「中野康章旧蔵『鹿百首』について」（中西健治先生喜寿記念論集編集委員会編『日本古典文学の言葉と思想』武蔵野書院 二〇二四年）に論じた。本稿では、中野康章旧蔵本の全文を翻刻する。それとともに、五つの伝本との校合を示す。

〔凡例〕

中野康章旧蔵『鹿百首』（以下、「中野康章旧蔵本」）を翻刻する。翻刻に際しては、原本に忠実であることを優先したが、つぎの方針に従い、手を加えた部分がある。

- 一、漢字、仮名の別、仮名遣い、送り仮名、清濁などは、原則として原本のとおりにした。
- 二、漢字の字体は、慣用的な略字体・異体字を含め、原則として通行の字体に統一した。
- 三、おどり字の表記は、原本のとおりにした。
- 四、改行は、原本のとおりにした。
- 五、原本の欠損などの原因で、文字を判読できない箇所がある。字

川崎 佐知子

数を推定できる場合は、その字数分だけ「□」であらわした。字数を推定できない場合は、「（ ）」であらわした。

六、和歌には、『新編国歌大観』第十卷所収26『為兼鹿百首』に付される通し番号を付けた。

七、丁移りを、「（一丁表）」のように示した。

あわせて、稿者が現時点までに確認できた五本との本文異同が認められる場合は、翻刻本文の該当箇所後の括弧内、もしくは左行に、「＊」を付して示した。和歌本文の異同は句ごとに示した。対校は、原則、用字・仮名遣いの相違も対象とした。対校本五本の名称と略号は、つぎのとおりである。

・国立歴史民俗博物館蔵高松宮家伝来禁裏本（資料番号〈H-000459〉、函号〈る函182〉） 略号歴

※国立歴史民俗博物館「館蔵高松宮家伝来禁裏本データベース」による。

・宮内庁書陵部蔵本（松岡本、函号〈二〇六・七一五〉） 略号松

※国文学研究資料館「国書データベース」による。

・宮内庁書陵部蔵本（鷹司本、函号〈二六六・一一一〉） 略号鷹

※国文学研究資料館「国書データベース」による。

・群書類従本（国立公文書館内閣文庫蔵『群書類従』（請求番号〈224

0039)、六百七十冊、元老院旧蔵) 第十一輯 和歌部 卷第一百七十六)

略号群

※国立公文書館「国立公文書館デジタルアーカイブ」による。

・大阪公立大学杉本図書館森文庫蔵本(書誌ID〈B00239478〉、請求

記号〈911.104/FUJ〉) 略号森

※大阪公立大学図書館杉本図書館「文庫データベース」による。

〔翻刻〕

外題(中野康章旧蔵本)「鹿百首^{為兼卿}」(表紙中央ニ打付書)

扉題(中野康章旧蔵本)「□□卿鹿百首^{春日社法衆 為兼卿詠}」

鹿百首^{春日社法衆}

為兼卿(※「為兼卿鹿百首^{春日社法衆}」群・森)

春卅首(※「春廿首」歴「春卅首」松「春二十首」群・森)

立春

1 春日山春立くらしさをしかのあさ行峰に霞たなひく

※四「朝行峰に」群・森

子日

2 さほ鹿もねのひやすらん春日野の小松かはらに今朝そむれ行

※初「さほ鹿も」松「さをしかも」群、二「子日やすらん」群・森、

結「けさそむれ行」群・森

鶯

3 秋はをのか心にわきし鹿までも鶯の音に春をしるらし

※結「春を知らし」群・森

霞

4 あさく霧分なれしさを鹿もかすめる空の春やさひしき(一丁

表)

※初「朝く」に」群・森、二「霧わけなれし」群・森、三「さをしかも」群・森

若菜

5 「雪まのわかなふみ分て鹿そむれはむかすかの、原

※三「つみ分て」松「つみ分て」鷹「つみ分て」群・森、結「春日の、原」群・森

□雪

6 「むらくみゆる雪のうへにあさはむ鹿の跡そのこれる

※題「残雪」松・群・森、四「朝はむ鹿の」群・森

□

7 「にや心をうつす梅かえのにはふあたりは鹿そはなれぬ

※題「梅」松・群・森、四「匂ふあたりは」群・森

柳

8 鹿のたつとをちの野への柳かけなひく気色も春そのときき

※初「鹿の立」群・森、四「なひくけしきも」群・森

早蕨

9 いとはやもえ出にけりさをしかのあさるをかへの春のさはらひ(二丁裏)

(二丁裏)

※二「え出にけり」群・森、四「あさる岡への」群・森、結「春の

さわらひ」歴・森「春の早蕨」群

桜

10 あつさ弓春の日あかぬ桜かり分行すゑに鹿そおとろく

※四「わけ行末に」群・森

春雨

11 春雨に花ちる山のさをしかは木葉時雨し秋やわすれぬ

*四「木の葉時雨し」松・鷹「木の葉しくれし」群・森、結「秋や忘れぬ」群・森

春駒

12 若草をつまよとよにたのむらん駒にまされる春のさを鹿

*二「妻とやともに」群・森、結「春のさをしか」群・森

帰雁

13 秋霧をまたわけとてやちきるらん鹿たつ峰にかへる雁かね

*二「またわけてとや」群・森、三「契るらむ」群「契らん」森、四「鹿立峰に」群・森

喚子鳥

14 をしか立山路のすゑによふこ鳥たれをよふとかさのみ鳴らん（二丁表）

*題「呼子鳥」群・森、二「山路の末に」歴・群・森、三「呼子鳥」

群・森、四「誰をよふとか」群・森、結「さのみ啼らん」群・森

苗代

15 せきかへるなしろ水にたつ鹿はをのかけにや友をしるらん

*初「せきかへる」松「せきかくる」群・森、二「苗代水に」群・

森、三「立しかは」群・森、四「をのか影にや」群・森

堇

16 さをしかもつねより野へやなつかしきすみれ花さく春の此ころ

*四「堇花さく」群・森、結「春の此比」歴・松・鷹・群・森

杜若

17 かきつはた花さく比は沢水のわけ行鹿もかけそへたつる

*二「花咲比は」群・森、三「さは水の」群・森、四「分行鹿も」

群・森、結「影そへたつる」群・森

藤

18 「」らぬたのみをかくる春日山しかもあれぬか北の藤波
*初「」みぬ」群・森、四「鹿もあれぬか」群・森、結「きたの藤波」森

款冬

19 「」もいはてやおしむ春くる、名残の色の山吹の花」（二丁裏）

*初「さをしかも」松・群・森、三「春暮る」群・森、結「山吹のはな」歴「山ふきの花」森

三月尽

20 「」はかり野山を分る身ともかなわかる、春をしたひ送らむ

*初「鹿はかり」松・群・森、二「野山をわくる」群・森、結「したひ送らん」松・鷹

夏十五首（一首不足）

更衣

21 衣手もうすきにたつる今よりや鹿も夏けにかへんとすらん

*二「うすきにたつる」松「うすきにうつる」群・森、四「鹿も夏毛に」森、結「かへんとすらむ」群・森

卯花

22 山かけやのへにつゝける道なれは卯花かけに鹿もたつなり

*二「野へにつゝける」群・森、結「鹿も立なり」歴・松・鷹・群・森

葵

23 秋山にすむやをしかもあふひ草かさすみあれのけふは知らん

*三「葵草」群・森

郭公（三丁表）

24 ほとゝきすこゑを尋て分くれはさとたつ鹿の跡そのこれる

*初「郭公」群・森、二「こゑをたつねて」群・森、三「分ゆけは」

群・森、四「さとたつ鹿の」松「さき立鹿の」群・森、結「跡そ残れる」群

昌蒲

25 もろ人のあやめひくてふ声くにおとろく鹿はみ山にそいる

*題「菖蒲」群・森、三「沼水に」歴・松・鷹・群・森、四「鹿もけふこそ」歴・松・鷹・群・森、結「をり立てけれ」歴・松・鷹「おり立てけれ」群・森

26

*歴・松・鷹・群・森二題「早苗」、和歌「さなへとるすその、田子の声くにおとろく鹿はみ山にそいる」トアリ。

照射

27 五月やみおのへにみゆる火のかけは山のさいをの鹿まつらしも

*二「尾上にみゆる」群・森、四「山のさつをの」歴「山のさいをの」松「山のさつおの」群・森

本云 五月雨哥落

*「本云 五月雨の哥落」歴・鷹「五月雨の哥落五月雨」松「五月雨歌闕」群・森

盧橘

28 かほるかにおのへの鹿もたちそよるたち花匂ふ山かけのやと

*初「かほる香に」群・森、三「立そよる」群・森、四「たち花にほふ」歴・松・鷹・群・森、結「山かけの宿」歴・松・鷹「山陰のやと」群・森

蛩（三丁裏）

29 鹿のふす夏野の草の露までも蛩のかけに光をそみる

蚊遣火

30 かやり火のけふりはよはる夕暮の月出る嶺に鹿の入ぬる

*二「煙はよはる」群・森、四「月出る峰に」群・森、結「鹿のいりぬる」森

蓮

31 はちす葉も花さくほとに成にけりをしか妻こひ秋ちか、りし

*四「をしか妻こふ」群・森、結「秋ちからし」松「秋ちか、らし」群・森

氷室

32 ひむろ山冷しき陰にたのみてや木の下草に鹿もふすらん

*初「氷室山」群・森、二「涼しき陰と」歴・松・鷹「す、しき陰と」群・森、四「木の下くさ」森

泉

33 やとにせく石まの水の涼しさに鹿もつねにそ立ならしける

六月祓（四丁表）

34 みそき川夕浪かけて立風も鹿の鳴へき秋いそくなり

*初「御祓川」群・森、二「夕波かけて」歴・松・鷹「夕なみかけて」群・森、四「鹿の啼へき」群・森、結「秋いそく也」群・森

秋甘首（*「秋二十首」群・森）

立秋

35 秋きぬとけふ吹風にをしかふす野原の草も今や露けき

*二「けふふく風に」群・森

七夕

36 七夕もあふ夜になれはさをしかのつまこひすへき時はしるらん

*四「妻恋すへき」群・森、結「時は知らん」群

萩

37 をきあかす白露おもふさをしかの分行野へに萩をかたよる

*二「白露おもふ」松「白露おもみ」群・森

女郎花

38 をのかつま思ひなしてやをみなへし露けき野へに鹿はふすらん
(四丁裏)

*初「をのか妻」群・森、二「おもひなしてや」群・森、三「女郎花」群・森、結「鹿は臥らん」群・森

薄

39 をしかなく野へのお花のうへよりもうれへの袖を露はひまなき

*二「野への尾花の」群・森

荳蔻

40 露なからみたれそまさるさを鹿の鳴音もしけきのへのかるかや

*二「みたれてまさる」森、四「鳴音もしけき」群「啼音もしけき」

森、結「野へのかるかや」群・森

蘭

41 さをしかのつまとふ野へのふちはかましほれて露のをかぬ日もなし

*初「小男鹿の」群・森、二「妻とふ野辺の」群「妻とふ野への」森、三「藤はかま」群・森

萩

42 萩原や秋に吹てふ風の夜につまこひすらし鹿ぞ鳴なる

*題「萩」鷹、初「萩原や」鷹「萩はらや」群・森、四「妻恋すらし」群・森、結「鹿そなくなる」群・森

初雁

43 □雁もいまそ鳴なるさをしかのしからむ萩の色かはるころ」(五丁表)

*初「初雁も」松「はつ雁も」群・森、二「今そ啼なる」群・森、四「しからむ萩の」松

鹿

44 三とせふる秋のうれへは登日野に音に鳴鹿も思ひしるらん

*三「登日野に」松「春日野に」群・森、四「音に鳴しかも」群・森、結「思ひ知らむ」群・森

露

45 春日野の露も色そへわかうれへ鹿もあはれと思ひしるまで

*結「思ひしるこそ」歴「おもひしるまで」群・森

霧

46 鹿よりも音そ流れける三とせまで雲へたつる秋霧の空

*二「音そなけれける」歴・松・鷹・群・森、結「秋霧のそら」森

槿

47 をしか立野原は庭もひとつにて垣ほにはへる朝かほのはな

*結「朝かほの花」群「あさかほの花」森

駒迎

48 さをしかもむれて行なりもち月の駒引つゝく相坂の道」(五丁裏)

*二「むれて行也」群・森、三「望月の」群・森、四「駒ひきつゝ」群・森、結「あささかの道」群・森

月

49 鹿はかり鳴音哀とみかさ山さしもくもらぬ月はしるらん

*二「鳴音あはれと」群・森、結「月は知らん」群

擣衣

50 なく鹿もきぬたのをとも打絶てねられすなけく友と成ぬる

*二「きぬたのをとに」歴「きぬたの音も」群・森、三「打たえて」群・森

虫

51 た、になく虫のねよりもさほしかのつまこひするそ思ひそふらん
 *初「た、に啼」群・森、二「むしのねよりも」群・森、三「さをしかの」歴・松・鷹・群・森、四「妻恋するそ」群・森、結「思ひそふらむ」森

菊

52 さをしかも花にやめつる秋ふかき山ちの菊のかけになくなり

*四「山路の菊の」群・森、結「陰になく也」群「かけになく也」森

紅葉

53 つまこひの鹿の音きこゆ時雨ふる山の木のはも色まさるころ（六丁表）

*初「妻こひの」群・森、二「鹿の音聞ゆ」群・森、四「山の木の葉も」群・森、結「色まさる比」歴・松・鷹・群・森

九月尽

54 この秋もまた暮はつる身のうさは鹿とともにそ音を鳴にける

*初「此秋も」群・森、四「鹿もともにそ」群・森、結「音を啼にける」群・森

冬十五首「一首不足

初冬

55 冬の来て木の葉吹しく山かけに鹿も涙やもろく露そふ

*初「冬のきて」群・森、二「木のは吹しく」群・森、三「山陰に」群・森、四「しかも儀儀や」松、結「もろく露露そふ」松「もろく落落そふ」群・森

時雨

56 むら時雨ふりまさる比は山かせに鹿の鳴ねもひまなかりけり

*二「降まさる比は」群・森、三「山かせも」歴・松・鷹「山風も」

群・森、四「鹿の鳴音も」歴・群・森、結「ひまなかりける」歴

霜

57 さをしかのふす野のを花末ふして霜をきまさる今朝の寒けさ

*二「ふす野すのを花」松「ふす野の尾花」群・森、四「霜置まさる」群・森、結「けさの寒けさ」群・森

霰「六丁裏」

58 あられちる野風はけしみをしかのをのかふしともふしうからまし

二「野風はけしし」歴「野風はけしく」松・群・森

雪

59 雪ふかきみ山の鹿も我はかりうつもれまさる物はおもはし

*結「ものはおもはし」群・森

寒蘆

60 冬枯の沢へにたてるあしからもふしける鹿そ風におとろく

*二「沢辺にたてる」森、三「あしかも、」群・森

千鳥

61 さほ川に千鳥しはなく春日野の鹿もこよひの霜やさむけき

*二「千鳥しは鳴」群・森、結「霜や寒けき」群・森

氷

62 春日山やま、た水もこほる夜に鹿のうはけも霜むすふらん

*二「やま、た水しも」松「やました水も」群・森、三「氷る夜に」群・森、四「鹿のうは毛も」群「鹿のうは毛に」森、結「霜結らむ」歴・松・鷹「霜むすふらむ」群・森

水鳥「七丁表」

63 さる沢の池辺にたてるさをしかのかけにおとろく鴨のむら鳥

*二「池辺に立る」群・森、四「影におとろく」群・森、結「かもの

むら鳥」森

網代

64 あしろ木によるてふ浪の立るにも世を宇治山は鹿や住憂

*二「よるてふ波の」群・森、三「立居にも」群・森、四「世を宇治山は」森、結「鹿や住うき」歴「鹿やすみうき」群・森

神楽

65 三笠山さ夜更かたの神あそひ庭火の影に鹿そたちよる

*二「さよ更かたの」群・森、四「庭火のかけに」群・森、結「鹿そ立よる」群・森

鷹狩

66 みかり野やとたちをあさるかりこゑにおとろく鹿そたちもきにける

*結「たちもきにけり」歴「たちもきにける」松「立のきにける」群・森

炭竈

67 さをしかの跡にまかせてすみかまの煙分みる大原のやま

*三「炭竈の」群・森、四「煙わけみる」群・森、結「おほ原の山」群「おほはらの山」森

歳暮」(七丁裏)

68 ことしさへさてやくれなん春日の、鹿も哀をかけよと思ふに

*二「さてや暮なん」群・森、三「春日野の」森、四「鹿もあはれを」群・森

恋十首

初恋

69 こひそむる心よりしてさを鹿の音に鳴はかりおもふとはしれ

*三「さをしかの」群・森、四「音に啼はかり」群・森、結「思ふと

はしれ」群・森

思恋

70 さを鹿は音になく比も我はかり思ふ心をしのひやはせん

*題「忍恋」群・森、二「音に鳴比も」群「音に鳴ころも」森、結「しのひやはせむ」森

不逢恋

71 鹿はかり声にたつともあはれとはいもいはぬもあふことなくに

*四「いもいはぬかも」歴・松・鷹・群、結「逢事なしに」群・森

初逢恋

72 をしかふす野原の秋の初お花かはしそめても袖そ露けき」(八丁表)

*三「初尾花」群・森、四「かくしそめても」森

後朝恋

73 時しもあれ鹿も鳴なりきぬぐに成わかれ行しの、めのそら

*三「衣ぐに」群・森、四「成わかれ行」松「なりわかれ行」群・森、結「しの、めの空」松・鷹・群・森

逢不逢恋

74 又もやとたのみし中はむなしくて身を秋風に鹿もなく也

*結「鹿もなくなり」歴「鹿も鳴也」松・鷹「鹿も鳴なり」群・森

旅恋

75 をしか鳴たひねの野への雪の床いもこひあかし夢もむすはす

*初「をしか啼」群・森、三「雪の床」松「露の床」群・森、四「いも恋あかし」群・森

思

76 音にたて、鳴やをしかも我はかり思ふおもひはをよひしもせし

*結「およひしもせし」群・森

片思

77 身をしれは哀そふかきさを鹿も心かよはぬ妻やこふらん（八丁裏）

*二「あはれそふかき」群・森

恨

78 をしかなく野原のま葛秋風にうらみても猶あかぬころかな

*初「をしか啼」群・森、二「野原のまくす」群・森、結「あかぬころ哉」歴「あかぬ比哉」松・鷹・群

雑廿首（*「雑十首」歴「雑二十首」群・森）

暁

79 身のうれへ心にあまる暁のねさめよと、ふよその鹿の音

*四「ねさめよと、ふ」松「ねさめこと、ふ」群・森、結「よそのしかの音」松「よその鹿のね」群「よそのしかのね」森

松

80 みかさ山神のめくみを松かけに鹿よりも猶音はなけれり

*二「神の恵を」群・森、四「鹿よりもなを」群・森

竹

81 うきふしはなれもやしけささ、竹の夜をかさねても鹿の鳴らん

苔（九丁表）

82 をくら山苔の岩かねふみならし鳴やをしかも世中やうき

霧

83 春日野の鹿もあはれめ和哥の浦に道まとふ霧の独鳴音を

*題「鶴」歴・松・鷹・群・森、四「道まよふつるの」歴「道まとふつるの」松・鷹「道まとふ鶴の」群、結「独なく音を」森

山

84 みかさ山神たにすつるさをしかの音になくよりもふかきうれへを

*二「神たにまつる」森、四「音に鳴よりも」群・森

河

85 袖ぬらす哀は鹿も思ひしれたえて影みぬさほ川の水

*二「あはれは鹿も」群・森

野

86 ふみわけし道たへはつる春日野に又もやきかんさを鹿の声

*初「ふみわけし」松、二「道たえはつる」松・鷹・群・森、四「又もや聞ん」群・森、結「さをしかの声」群・森

関（九丁裏）

87 鹿はかりかよひなれまし春日野にいかなる関そわか道もなき

橋

88 橋姫も月になく音やかよふらん宇治の渡のさほしかのこゑ

*初「はし姫も」群・森、二「月に鳴音や」群「月に啼音や」森、四「宇治のわたりの」群・森、結「さをしかの声」歴・松・鷹・群、「さをしかのこゑ」森

海路

89 月にこく夜舟はるかに音すみて鹿のねおろすむこの山かせ

*四「鹿の音おろす」歴、結「武庫の山風」群「武庫のやまかせ」森

旅

90 鹿の音に草の枕もかなしきは都こひしき松風の夜半

*初「鹿の音も」歴・松・鷹・群・森、結「松風のよは」群「まつかせのよは」森

別

91 鹿のねもあはれとかなく故郷をわかる、跡のしの、めの空

*初「鹿の音も」歴・群・森、三「古郷を」群・森、結「しの、めのそら」森

山家「十丁表」

92 松のかせしかのなく音もき、わひぬ浮世におなし山かけの庵

*二「鹿の鳴音も」群・森、三「聞わひぬ」群・森、四「浮世のおなし」歴

田家

93 世を秋に思ひ侘ぬる時しもあれ門田の面に鹿もなく也

*結「鹿もなくなり」歴「鹿も鳴也」松・鷹・群

懷旧

94 すみなれし雲ゐをこふる月の夜に哀をそへて鹿も鳴也

*結「鹿もなく也」森

夢

95 雲のうへにかよふとみつる夢たにも鹿の鳴音に又たへにけり

*結「又たえにけり」歴・松・鷹・群・森

無常

96 鹿のなくこゑのにもつねならぬ世のことはりははなれさりけり

*二「こゑのうちに」歴・松・鷹「声のうちに」群・森、三「常ならぬ」群・森

述懐「十丁裏」

97 あやまらぬ身をやはすてんことはりをあはれさためし春日野の鹿

*四「哀さためし」群・森、結「春日の、鹿」群・森

祝

98 みかさ山君のさかへを松風に鹿も千とせのこゑかよふなり

*結「声かよふ也」群・森

此百首は春日社にて為兼卿夢想の事ありて

一時に鹿の百首をよみて奉納せられ侍るとや

(*)「とや」―「かや」歴「と也」群・森

永和四年五月日「十二丁表」

右百首借持明院三位基春卿 本書写之者也
右兵衛督

(*)「本云」―ナシ群・森

明応九年季秋廿日

以中御門大納言宣秀卿 自筆本書写了(*)「了」―ナシ群・森

享祿元年十月晦日 倉部郎判「十一丁裏」

(*)「判」―「花押影」歴・松・鷹・群・森

(遊紙二丁)

(*)群・森ハ以降ノ本文ナシ)

積興考

・為兼卿 故從二位為教卿男
母故修理權大夫三善雅衡朝臣女

へ建長八年正月七日叙爵 へ正嘉二年二月廿七日從五位上

(*)「二年」―「二年」松

へ同三年正月廿一日侍從 へ文永四年正月五日正五位下 へ同五年

十二月二日右少將 へ同七年正月六日從四位下 へ同十二年正月六日

從四位上 へ建治元年十月八日左少將 へ同四年正月六日正四位下

二月八日土佐介 四月十一日轉中將 へ正応元年七月十一日

(*)「十一日」―「廿一日」歴

補藏人頭 へ同二年正月十三日任參議元藏人頭 四月廿九日
左中將

叙從三位 へ同三年正月十三日兼讃岐守 六月八日兼右兵衛

督 十月廿七日轉右衛門督 十二月八日叙正三位石清水賀茂
行幸行事賞

(*)「十月」―「十一月」歴・松・鷹

〱同四年七月廿九日任權中納言 〱同五年七月廿八日叙從二位(十二丁表)

〱同六年八月五日改元 永仁元 〱永仁二年正月六日叙正二位 〱同四年

五月十五日辞 〱同六年三月十六日坐事四十五歳 〱同七年

四月廿五日 〱正安三年在配所 四十八 〱乾元二年閏四月日自関東蒙

除自佐渡国被召返也五十歳 〱延慶三年十二月廿八日任

(*)「蒙除」―「蒙免除」歴・松・鷹

權大納言 〱同四年十二月廿一日辞 〱応長二年八月廿三日

聴本座 〱正和二年十月十七日出家依上皇 御出家 法名蓮覚 後改 静覚

井蛙鈔曰 法皇花園院 御物語云為兼卿 号京極 大納言 云云

〱或記曰玉葉 伏見院花園在位 前大納言為兼撰云云

(*)鷹ハ以降ノ本文ナシ)

〱増鏡老のなみ (*)「増鏡」―「増鏡」歴

建治三年正月持明院殿の花さかりに新院わたり給ふ(十二丁裏)

(*)「給ふ」―「給に」歴

鞠のかゝり御らんせんとなり

〱為兼むらさき草為道はあるしらちなりけり為兼
とは為氏の大納言のをと、兵衛督為教といひし
子なり

(*)「いひし」―「いひしか」松、「なり」―「也」歴

〱岡本関白家平公記曰正和二年十月十七日今日
太上天皇可有御出家日也中略 前權大納言為兼卿

法名蓮覚 追改静覚 (十三丁表)

(*)「太上天皇」―「太上天皇」歴・松、*「御出家日也」中略―

「御出家日也」中略 今日出家輩 歴「御出家日也 御出家輩」松

(*)鷹ハ以降ノ本文ナシ、松ハ「松岡平次郎辰方(花押)、群・森ハ
「右以松岡辰方本書写校合畢」

文政九年正月下澣書写

献之

從三位大伴積興行年八十歳 (十三丁裏)

(本学文学部教授)